

平成28年度 福島大学大学院人間発達文化研究科入試問題

専攻(領域)名	教職教育(学校教育)【教育心理学】	科目名	教育心理学	受験番号	
---------	-------------------	-----	-------	------	--

- I 以下の用語群の中から3つを選択して、それぞれ簡潔に説明しなさい。
解答は解答用紙Iに選択した用語を明示した上で記述すること。

用語群

行動経済学, 進化心理学, 注意の特徴統合理論, 半空間無視,
意味的プライミング効果, 批判的思考, 情動知能, 自己開示, 心の居場所
帰属理論, アタッチメント, 学習性無力感, タイプA性格, 性格の類型論,
(マズローの)自己実現, 対象の永続性, 自閉症スペクトラム障害,
効果量, 信頼区間

平成28年度 福島大学大学院人間発達文化研究科入試問題

専攻(領域)名	教職教育(学校教育)【教育心理学】	科目名	教育心理学	受験番号	
---------	-------------------	-----	-------	------	--

II 以下の問いに答えなさい。解答は解答用紙IIに、解答番号を記した上で記述すること。

- (1) 「心の理論」について説明しなさい。
- (2) 小学校に、「心の理論」の観点から配慮が必要な子どもがいる場合がある。
その場合の対応として、教師のどのような工夫が考えられるか。

III 次頁の資料を読んで、以下の問いに答えなさい。解答は解答用紙IIIに、
解答番号を記した上で記述すること

- (1) 教師との交流経験が学習意欲に与える影響について、結果をまとめなさい。
- (2) 友人との交流経験が学習意欲に与える影響について、教師と異なる点を述べなさい。
- (3) この研究結果にもとづいて、他者との相互作用が学習意欲に与える影響について考察しなさい。

出典：実践心理データ解析 [改訂版] 問題の発想・データ処理・論文の作成 田中敏 新曜社 2006

専攻(領域)名	教職教育(学校教育)【教育心理学】	科目名	教育心理学	受験番号
---------	-------------------	-----	-------	------

『中学生における交流経験と学習意欲との関係』

問題

生徒が学習意欲を喚起するとき、その生徒をとりまく他者の影響は無視できない。特に学校場面では教師や友人との相互関係は大きな影響をあたえるであろう。個人の意欲はその個人をとりまく他者との相互関係において支えられたり強められたりしていると考えられる。

近年、内発的動機づけの研究文脈においても個人の自律性(autonomy)と並んで他者との関係性(relatedness)という重要な概念が登場しつつある(Connell & Wellborn, 1991; 中山, 1995; Ryan, 1991)。

そこで、本研究は実際に学校場面における生徒と他者との関係性を、交流経験の程度として調べてみることにした。

学校場面における重要な他者は教師および友人であろう。したがって、生徒の主要な交流経験として教師および友人との交流経験を取り上げる。また、こうした他者との関係と比較するため、生徒の個人的問題として学業上の成功経験を取り上げる。そして、これらの交流経験または学業上の成功経験が多い者と少ない者とは、どのように学習意欲の起こり方が異なるのかを比較検討することにした。

質問紙 教師との交流経験、友人との交流経験、学業上の成功経験をたずねる項目それぞれ4個と(表17参照)、これに対応する教師・友人との交流場面および学業上の成功場面で、どの程度学習意欲が起こるかをたずねる項目それぞれ4個(表18参照)の計24項目からなる質問紙。交流経験・学業成功経験をたずねる項目への回答は「よくある」「少しある」「あまりない」「ほとんどない」の4段階評定であり、学習意欲の喚起をたずねる項目については0%から100%までの10%きざみの回答とした。

手続き 調査は集団で実施した。対象者に質問紙を配布し、対象者ベースで回答させた。最初に、教師・友人との交流場面および学業成功場面で起こる学習意欲について回答させ、次に、交流経験または学業成功経験について回答させた。これら3場面の学習意欲と3種類の交流・学業経験をたずねる項目は、質問紙ごとに掲載順序を無作為に入れ替えておいた。また、各対象者について教研式全国標準診断的学力検査の得点を別途入手した。

表17 交流経験・学業成功経験についてたずねる項目

教師交流経験	友人交流経験	学業成功経験
先生から認められたこと	何でも話せる友達ができたとこと	勉強が計画どおり進んだこと
先生にやる気があったこと	友達が頑張っていたこと	問題の解き方がわかったこと
好きな先生だったこと	友達に励まされたこと	テストの成績が良かったこと
先生が一人一人に教えてくれたこと	仲の良い友達と勉強したこと	授業の内容に興味があったこと

⑧ 質問紙の指示は次のとおり。「小学校時代から現在まで次のような経験をしたことがありますか。当てはまるところに○を付けてください。」回答は「よくある・少しある・あまりない・ほとんどない」の4段階評定。

表18 学習意欲の喚起をたずねる質問

教師との交流場面	友人との交流場面	学業上の成功場面
先生から認められたとき	何でも話せる友達ができるとき	勉強が計画どおり進んだとき
先生にやる気があったとき	友達が頑張っていたとき	問題の解き方がわかったとき
好きな先生だったとき	友達に励まされたとき	テストの成績が良かったとき
先生が一人一人に教えてくれたとき	仲の良い友達と勉強したとき	授業の内容に興味があったとき

⑨ 質問紙の指示は次のとおり。「あなたが最高にやる気が出た場合を100%とします。次の場合は何%のやる気が出ますか。0%から100%までの間で10%きざみで答えてください。」

方法

計画 2×3の被験者間計画。第1要因は経験の多少の2水準であり、第2要因は学力の上中下3水準である。この第1要因を教師との交流経験、友人との交流経験、および学業上の成功経験に替えて同計画を3回くり返す。

対象 公立中学校2年生320人。

結果

教師・友人との交流経験および学業上の成功経験についての回答は「よくある」を4点、「少しある」を3点、「あまりない」を2点、「ほとんどない」を1点とし、各経験の4項目の合計をもって各対象者の得点とした。得点範囲はいずれも4-16である。それぞれの経験ごとに平均を算出し、この平均未満の対象者を「経験少」とし、平均以上の対象者を「経験多」とした。

また、教研式全国標準診断的学力検査の得点において偏差値60以上の対象者を「学力上位」、偏差値50-53を「学力中位」、偏差値45以下を「学力下位」とした。

学習意欲の回答はパーセンテージの回答をそのまま得点とみなし、各場面の4項目の合計をもって各対象者の学習意欲得点とした。満点は400である。

結果(最初の2段落省略)

まず、教師との交流経験(2)×学力水準(3)によって教師交流場面の学習意欲を分析した。表20は各群の人数および学習意欲得点の平均と標準偏差を示したものである。

表20 教師との交流経験による学習意欲の程度(満点400)

交流経験	多い			少ない		
	学力 上位	中位	下位	上位	中位	下位
N	44	49	34	35	44	30
Mean	240.9	240.0	225.6	189.7	199.8	160.0
S. D.	69.3	69.0	61.7	79.1	71.5	73.6

分散分析の結果、教師との交流経験の主効果($F_{(1,230)}=32.28$)が1%水準で有意であり、学力の主効果($F_{(2,230)}=3.31$)が5%水準で有意であった。交互作用は有意でなかった。学力の主効果についてLSD法を用いた多重比較をおこなった結果、学力上位・中位の平均が学力下位の平均よりも有意に大きいことが見いだされた($MS_e=4858.25, p<.05$)。

次に、友人との交流経験(2)×学力水準(3)によって学習意欲を分析した結果(表21参照)、交互作用が有意であった($F_{(2,230)}=3.12, p<.05$)。交流経験の単純主効果を検定したところ、学力上位・中位では5%水準で有意であり(学力上位 $F_{(1,230)}=5.00$, 学力中位 $F_{(1,230)}=4.91$)、学力下位では1%水準で有意であった($F_{(1,230)}=27.93$)。また、学力の単純主効果は、交流経験多において有意でなかったが($F<1$)、交流経験少において有意であった($F_{(2,230)}=5.92, p<.01$)。LSD法を用いた多重比較の結果、交流経験少では学力上位・中位の平均が下位の平均よりも有意に大きかった($MS_e=4839.31, p<.05$)。

表21 友人との交流経験による学習意欲の程度(満点400)

交流経験	多い			少ない		
	学力 上位	中位	下位	上位	中位	下位
N	47	45	33	32	48	31
Mean	249.1	259.8	256.7	213.4	224.4	172.3
S. D.	73.7	63.3	69.6	73.6	63.2	70.2

最後に、学業上の成功経験(2)×学力水準(3)による学業成功場面の学習意欲を分析した。表22は各群の学習意欲得点の平均と標準偏差である。

表22 学業上の成功経験による学習意欲の程度(満点400)

成功経験	多い			少ない		
	学力 上位	中位	下位	上位	中位	下位
N	46	47	36	33	46	28
Mean	304.8	302.3	245.0	268.5	278.0	222.9
S. D.	55.4	55.3	57.9	64.9	54.4	76.0

分散分析の結果、学業成功経験の主効果($F_{(1,230)}=11.79$)、学力の主効果($F_{(2,230)}=20.52$)が共に1%水準で有意であり、交互作用は有意でなかった。LSD法を用いた多重比較によれば、学力上位・中位の平均と下位の平均との間に有意差があった($MS_e=3660.91, p<.05$)。